

校長だより 6月

暴走しやすい「正義」と「善」

最近、SNS やネット記事のコメント欄を読んでいて、ある出来事に対する批判や意見を見るととても嫌な気持ちになることがあります。とくに強烈な主張や偏った批判がなされているものを見ると多くが匿名であり、何か間違った正義を振りかざしているように思えます。また、「その正義のためなら他人をおとしめていい」といったような社会的制裁を徹底して加えるものなども見受けられます。きっと、子どもたちもこういったものにふれているなら、余計に心配されるところです。

こういったメディアリテラシーなどについて明治大学などで教えておられ、また、作家・映画監督でもある森達也先生は以下のようにコラムに書かれています。

昨今のコンプライアンス重視はある意味必要な流れだと思いますが、一方では法にすべて任せて思考停止するなど、行き過ぎると融通が利かなくなり、逆に生きづらくなります。

数年前のコロナ禍では“自警団”が、外出規制に違反した人を見つけて厳しく断罪しました。昨今では、少しでも規範を逸脱すると「悪」と決めつけて、断罪する。好ましくない発言や行動をしたとして個人や組織を糾弾し、社会から排除しようとする「キャンセルカルチャー」が横行しています。人間は「正義」や「善」という意識が強いと、暴走しやすいのです。それを「大義」にして、歯止めが利かなくなってしまう。

ウクライナ戦争でもパレスチナ紛争でも、発端は自分たちの「善」と「正義」です。プーチンは「ウクライナ東部のロシア系住民が迫害されている」という大義名分を、ヒトラーでさえも「善」と「正義」のために「自衛のための戦争」を掲げていました。

人類がこれだけ進化してもいまだに戦争がなくなる原因に「人間には闘争本能があるからだ」と説明する人もいますが、僕はむしろ「自衛本能」のせいではないかと思います。家族や同胞を守るという意識が「正義」に結びつきやすく、これが過剰になると周りがみんな敵に見えて「だったら先制攻撃」となってしまう。それは「正義の行使」なのですが、違う角度から見たら、暴走であり暴力にほかなりません。 — 以上引用文 —

最近のメディアでは隠れていた「悪」を見つけ出し、そのことについての責任を取らせる役目を果たしていますが、それが過剰なものも少なからずあるのだと思います。また、弱い立場や自分と比べ異質なものを排除しようとした誹謗中傷やデマも多く見られ、人は自分に都合のいいものしか信じようとしめない風潮があると思います。

最後に森さんはこのように世の中に警告しておられます。「人間は想像力や主体性を失うと、どこまでも残酷になれるもの。今、そういう世の中になってきていると感じます。」

この言葉からも「人の気持ちを想像できる、主体性をもって生きる子どもたち」を育てていきたいと思いました。